

靖国神社の存在とその意義



中嶋 嶺 雄
(公立大学法人国際教養大学
理事長・学長、国際社会学者)

野田内閣と「靖国」

今回の民主党代表選考の過程では、新首相に就任した野田佳彦氏のスピーチが五人の候補のなかで断然光っていた。そのスピーチに共感して投票行動を決断した民主党議員も多かったのではないかと思われる。日本の政治もいわゆる政局政治や派閥政治から解き放たれて、スピーチの興味で政治が決まる「弁論」政治の第一歩が刻まれたのではないかと、野田首相への期待が大きくふくらんだ。

社へのA級戦犯の合祀に関連しては、この問題は日本が結んだサンフランシスコ条約で決着しており、「A級戦犯と呼ばれた人たちは戦争犯罪人ではない」という見解を平成十七(二〇〇五)年に国会での質問主意書で示していたというので、小泉首相同様の靖国参拝の約束を期待していたのだが、この期待はすでに消え失せてしまった。「首相在任中に靖国公式参拝はしない」と早々に明言したからである。同時に、民主党幹事長に小沢一郎元代表の保護者ともいえる参議院のボス、輿石東氏を任命したあたりから、野田氏への私の当初の期待は急速にしぼんでいった。

日中関係と靖国問題

最近の中国経済の著しい発展や軍事力の拡大に直面して、日中関係には新たな課題が突きつけられている。そうした状況下で民主党の政調会長に就任したばかりの前原誠二・元外相が去る一〇月七日にワシントンで講演し、「中国は既存の国際ルールの変更を求めめるゲーム・チェンジャーだ」として、最近の中国の動向に対する警戒感を表明したことは注目に値する。

日中関係には、棚上げされたまま時間を経ている問題が多々ある。それらの問題が休火山のように時々爆発し、マグマが大きく噴出する。

靖国神社の問題も、かつて歴代の日本の首相が靖国神社を参拝することは恒例で、日常的な行事の一つになっていたのだが、中曽根康弘首相が昭和六十(一九八五)年に敢えて公式参拝に踏み切り、それに対する中国の激しい反発があつて翌昭和六十一(一九八六)年にこれを中止したことによつて、以後中国はこの問題を常に

持ち出すようになった。

もちろん靖国神社は日本の神社である。中国にあるのではない。そこにA級戦犯が合祀されているようにも、日本国民の一般的な感情としては、戦争のいわば犠牲者としてお祀りし、お参りするものである。年間五〇〇万人もの人たちがお参りするということは、そのこと自体が日本の一つの大きな宗教的現実なのである。A級戦犯を靖国神社から引き剥がせという主張は中国側の論理であり、その中国側の論理は中国共産党の論理である。つまりひと握りの悪者に対して常に多数の大衆がいる、その大衆の味方が共産党なのだということに階級闘争中観なのだ。

では中国の民衆が一樣にこのような階級闘争史観に立っているかというところ、それは大間違いで、小泉政権の頃、私が北京で出会ったタクシーの運転手などは、「小泉首相は偉い。日本の靖国神社に日本の首相が行くのは当然だ」と強い調子で語っていた。

くつてしまったところに、日中関係の無粋な構造が露呈しているように思われる。今回、野田首相が就任早々に「在任中の靖国公式参拝はしない」と言明したことは、このような「贖罪外交」から日本の政治家が依然として解き放たれていないことを露呈していた。それは日本国民全体にとつて残念なことである。しかし、野田氏は一方で「A級戦犯問題は存在しない」という歴史観を示しているのであるから、公式参拝ではなくても様々なかたちで靖国神社へ参拝できるのだから、是非それを実現してほしい。多くの日本国民はそのことを待望しているに違いない。

靖国問題と死生観の違い

ところで靖国問題を考えるに際しては、日本人と中国人との間に生と死、つまり死生観の大きな違いがあることも忘れてならないであろう。中国人は、「死生一如」という言葉に示されるように、生と死のあいだに境はない、という死生観に立っていると考えてよい。

正午に黙禱を捧ぐ

正午、境内に時報が流されると参拝者の足並みは止り、境内一円は静寂に包まれた。数万人の参拝者は一斉に御本殿に向かって、それぞれ一分間の黙禱を捧げた。

相撲甚句が奉納

昼過ぎ、拜殿では、大勢の昇殿参拝者が見守る中、両国相撲甚句会（中川友次会長）会員十九名により恒例の相撲甚句が奉納された。昭和二十七年、極東国際軍事裁判で所謂A級戦犯とされた方々の収容されている巣鴨拘置所にて慰問大相撲と共に披露された際、収



御祭神に対し相撲甚句奉納

容者等が涙ながらに聞き入ったといわれる「新生日本」をはじめ全五曲が神前にて節回しも清々しく唄われた。

第二十五回戦歿者追悼

国民集会開催

また、神社外苑では午前十時三十分より「第二十五回戦歿者追悼国民集会」（英霊にこたえる会・日本会議主催）が開催され、二千人を超え人々が参加した。集会では、佐藤正久参議院議員・小野田寛郎小野田自然塾理事長・一色正春元海上保安官等が提言を行った。

拝観者で溢れる遊就館

社頭には折鶴も

遊就館には、この日約一万人が来館した。閉館まで拝観者の人波は途切れることがなく、展示室では、熱心に展示物に見入る拝観者の姿が多く見られた。

また拜殿前には、今年もキリスト聖書塾の方々が丹精込めて折り上げた数千羽もの折鶴が供えられた。

神職を目指す國學院・皇學館兩大學女子学生

神社で実習



儀式等で使用する「和琴」の奏法実習

去る八月十日から十六日までの七日間、國學院・皇學館兩大學神職養成階課程履修の女子学生十二名が、靖國神社で実習を行った。

実習生等は神職による講話や、遊就館の拝観等を通じて、神社の概要を学ぶと共に、早朝の社殿の清掃、月次祭等諸祭典への参列、神札授与などの神社実務を経験した。

特に八月十五日の終戦記念日の奉仕では、大勢の参拝者との接遇において、神社に対する遺族や崇敬者の想いを肌で感じ取っていた様子だった。

この実習を通じ、将来立派な神職として斯界に貢献されることを期待したい。

関西仏教懇話会参拝

去る八月十九日、四天王寺管長出口順得氏以下関西佛教懇話会の各宗派代表四十一名が、揃って当神社に参拝された。当日は、先ず拜殿において修祓、続いて英霊奉慰の仏式勤行を行った後、本殿にて正式参拝。次いで参集殿二階桜の間に於いて京極宮司から靖國神社の近況について約三十分に亘り講話をした。続いて一行は遊就館を拝観した後、神社を後にした。



拜殿で行われた慰霊の勤行

高額奉納

此の度、多くの篤志家より高額の奉納がありました。五十万円以上奉納の方に限り、御芳名を掲載させて戴き、改めて感謝の意を表します。

田平辰男命

松尾 辰子殿
(奈良県)

谷口一三命

谷口 と志殿
(岐阜県)

金山光夫命

小西 秀樹殿
(埼玉県)

鈴木清平命

(故) 富田 ふみ殿
(東京都)

島根正一命

島根 初枝殿
(埼玉県)

島根 清命

鈴木 文隆殿

鈴木賢一命

鈴木 洋子殿
(静岡県)

全祭神

富井 榮殿
(東京都)

藤田 尚正殿
(富山県)